



# 区別不可能性と包括的幻覚 『フッサールにおける超越論的現象学と世界経験の哲学』を手がかりにして

著者	國領 佳樹
雑誌名	モラリア
巻	22
ページ	101-115
発行年	2015-10-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/63014">http://hdl.handle.net/10097/63014</a>

【特集】佐藤駿著『フッサールにおける超越論的現象学と世界経験の哲学』

## 区別不可能性と包括的幻覚

『フッサールにおける超越論的現象学と

世界経験の哲学』を手がかりにして

國 領 佳 樹

知覚経験は私たちを直接的に世界へと繋ぐ第一の通路である。私たちは世界のなかに存在する対象を直接的に見ているのであり、他の何かを見ることがそれを間接的に見ているのではない。こうした考えは、知覚についての日常的な理解に即しているように思われる。しかし、よく知られているとおり、真正な知覚から区別不可能な幻覚の可能性を考慮に入れるならば、この素朴な考えには、たちまち疑いの眼が向けられることになる。

本論の主な目的は次の二つである。(1)『フッサールにおける超越論的現象学と世界経験の哲学』において佐藤が汲み取るフッサールの哲学的洞察から、上記の問題に対する現象学的な回答の一つを取り出し、(2)そうした回答がもつ難点を検討することである。

本論の構成は以下のとおりである。まず真正な知覚から区別不可能な幻覚の可能性がもたらす問題を確認し、それを佐藤が提示したフッサールの超越論的現象学(ないし現象学的観念論)の枠組のなかで捉えなおす(第一節)。次に、包括的な幻覚の可能性を排除する佐藤―フッサールの主張が、当該の問題に対して一つの回答を与えうるこ

とを指摘する（第二節）。そのうえで今度は、包括的な幻覚の可能性を排除する佐藤―フッサールの主張がどれくらい説得力のあるものなのかを検討する（第三節）。最後に、これまでの考察で提示した論点を確認する（第四節）。

### 1 知覚の問題とフッサールの現象学的観念論

これから検討する問題（知覚の問題）は、真正な知覚に関して私たちがふだんから前提にしている素朴な考えと、一見したところもっともらしい哲学的な主張から生じる<sup>〔1〕</sup>。まず私たちがふだんから前提しているように思われる素朴な考えを以下のように特徴づけよう。

#### 直接实在論

真正な知覚とは、心とは独立に存在する対象への直接的なアクセスである。

しかし、このような常識的で素朴な前提にくわえて、一見するともっともらしい以下の三つの哲学的前提を認めることには困難が伴う。

#### 区別不可能な幻覚

真正な知覚から主観的に区別不可能な幻覚が可能である。

## 現象原理

ある特定の感覚的性質をもつ何かが主体に感覚的に現われているならば、当の性質を実際にもった、主体によって気づかれている何かが存在する。

## 共通要素原理

主観的に区別不可能な二つの経験は本質的に同じ種の心的状態である。

以上の四つの前提は一つ一つは、それなりのもっともらしさをもっている。しかし、これらを同時に主張することには不整合がある。この点を露わにするのが幻覚論法である。この論法は様々な仕方で定式化できるが、さしあたり以下のように提示しよう。<sup>(2)</sup>

## 幻覚論法

(i) ある特定の感覚的性質をもつ何かが主体に感覚的に現われているならば、当の性質を実際にもった、主体によって気づかれている何かが存在する。(現象原理)

(ii) 幻覚の場合、ある特定の感覚的性質をもつ何かが主体に感覚的に現われているが、その何かに対応する対象など世界のなかには存在しない。

(iii) 真正な知覚から主観的に区別不可能な幻覚が可能である。(区別不可能な幻覚)

(iv) 主観的に区別不可能な二つの経験は本質的に同じ種の心的状態である。言い換えるならば、ある二つの経験が主観的に区別不可能ならば、両者は本質的に同じ種の心的状態である。(共通要素原理)

(v) それゆえ、(i) (ii) より、幻覚の場合、主体が気づいている何かは、世界のなかに存在するごくありふれた対象(心とは独立に存在する対象)ではない。

(vi) それゆえ、(iii) (iv) (v) より、真正な知覚においても、主体が直接的に気づいている何かは、世界のなかに存在するごくありふれた対象(心とは独立に存在する対象)ではない。(直接实在論の否定)

以上のように、もし現象原理、区別不可能な幻覚の可能性、共通要素原理を同時に認めるならば、真正な知覚経験の直接性が否定されることになるように思われるのである。そして、真正な知覚であれ幻覚であれ、その第一の対象は世界のなかに実際に存在しない心的対象(たとえば、センスデータ)とみなされる。

この問題をまえにして、私たちには次の選択が求められるだろう。すなわち、知覚経験に関する素朴な考えを保持するか、あるいはそれを放棄するかのいずれかである。フッサールの現象学的観念論の立場はこの問題に対してどのように答えることができるだろうか。

佐藤によれば、フッサールの現象学的観念論はその強弱によって二種類の形態に分けることができる(佐藤 2014:

162)。

## 観念論W

「いかなる現実的対象も志向的空間に属する。言い換えれば、いかなる現実的対象も可能的な意識の対象である」  
(佐藤 2014:161-162)

## 観念論S

「およそいかなる現実的対象（真に存在する対象）も、ある特定の顕在的かつ現実的意識の対象として、あるいはそれによって動機づけられた可能性として志向的空間に属する。言い換えれば、いかなる現実的対象も、ある特定の顕在的かつ現実的意識の対象であるか、それによって動機づけられた可能的意識の対象である。」（佐

藤 2014:176)

一見すると、どちらにせよフッサールが「観念論」と呼ばれる形而上学的立場をとる以上、真正な知覚に対する常識的で素朴な考えと相容れないように思われるかもしれない。しかしこのような判断は早計である。というのも、上記の二つのテーゼで主張されているのは、何かが実際に存在するためには、それが可能的な意識の対象でなくてはならない、と述べられているだけだからである。それゆえ、直接实在論に現れる「心とは独立に存在する対象」という表現は、これだけで上記の現象学的観念論に対立するものではないだろう。たしかに、この直接实在論によって、いかなる可能的な意識の対象にもなりえない存在者が存在しうる、ということが含意されるならば、両者は対

立することになる。しかし直接実在論は必ずしも、「いかなる可能的意識の対象にもなりえない存在者」などというものを認める必要はないのである。

佐藤によれば、フッサール現象学とは、「実在論が意識のある特定のシステム、志向とその充実化がおりなすきわめて複雑な諸々のテーゼのシステムによって紡ぎ出されていることを明らかにする」(佐藤 2014:192)ものである。つまり、それは、私たちの生活に根差した素朴な実在論的な考えそのものを説明するものであり、「こうした現象学そのものの提示する反省的認識とその表現が、しばしば常識的な世界観と対立するように見えるとしても、〔…〕一方が真であれば他方が偽であるのでなければならないような仕方で対立しているわけではない」(佐藤 2014:191)のである。

以上のことを考慮すると、もし直接実在論によって表現される考えが、私たちの生活に根差したものであるならば、それは、現象学的に理解され許容されうるものであり、決して単純に否定され拒絶されるものとはならないはずである。あるいは、少なくとも、ある意味では、現象学者は素朴な考えを保持する余地があることになる。

実際、多くの論者において、フッサール現象学は、知覚経験についての直接実在論的な考えを保持している、とみなされている。<sup>(3)</sup>そして、佐藤の定式化した例えば、フッサールの直接実在論は以下の二つのテーゼから理解できるだろう。

#### 自己性テーゼ (佐藤 2014:210-211)

知覚において対象(事物)は像や記号を介して与えられるのではなく、また推論(論理的操作一般)によって何らかの仕方 で想定されるのでもなく、むしろ「それ自身」として与えられる。

## 同一性テーゼ（佐藤 2014:212）

志向的对象は、少なくともあるケースにおいては、実際に存在する対象（事物）と同一である。

この二つのテーゼの連言こそが、直接实在論のフッサール流の特徴付けである。たしかに、直接实在論という私たちの素朴な考えは、真正な知覚の場合に直接気づかれていた何かが、幻覚において想定されるような特殊な心的存在者ではなく、世界に存在するごくありふれた対象である、と表明しているにすぎないのかもしれない。もしそうであるならば、先に定式化した現象学的観念論に加担していても、このような直接实在論を十分に認めることはできるのである。

こうしてフッサールの立場でも、知覚経験に関する素朴な考えが保持され、幻覚論法が拒否されると想定することができるのである。

## 2 区別不可能な幻覚の不可能性

では、幻覚論法を退けるために、上記の三つの哲学的前提のどれに疑いの目を向けるべきだろうか。そのなかで、もっとも有望なような選択肢は、前提（iv）の共通要素原理を退けることであるように思われる。<sup>(4)</sup>つまり、区別不可能性から同一性へ至る推論の妥当性がもっとも疑わしいだろう。

しかし佐藤の考察によって示唆されるのはむしろ、区別不可能な幻覚がありうるという前提（iii）を退ける、という興味深い選択肢の可能性である。幻覚論法では、真正な知覚から主観的に区別不可能な幻覚の可能性が前提にされ、それによって結論へと導く（vi）が利用可能になる。それゆえ、（iii）の否定もまた幻覚論法を退けるには



十分であろう。

この選択肢を私たちに与えてくれるのは、包括的な幻覚の不可能性に関する佐藤―フッサールの主張である。

われわれは真正な知覚経験を持ちえず、そうだと思っているものがすべて幻覚であると考えすることは可能であろうか。もし、我々がフッサールの述べていることを十分正確に要約しえているならば、そうしたことは不可能である。仮に我々の有している経験の流れが完全に調和的であるとしよう。その事実と、我々の持つものはすべて幻覚であるという仮定が整合的であると考えことは、まさにあの「形而上学的超越」を想定することにはかならない。

(佐藤 2014:246)

以上のことからわかるように、佐藤によれば、形而上学的超越を認めない限り、包括的な幻覚は不可能である。ここで「形而上学的超越」とは、先に確認したフッサールの現象学的観念論の否定を意味する。たとえば、観念論Sで考えるならば、いかなる顕在的かつ現実的意識の対象にも、そういった意識によって動機づけられた可能的意識の対象にもなりえない現実的对象が存在する、ということである。つまり、「形而上学的超越」とは、志向的空間に属さない対象のことである。したがって、現象学的観念論に加担するかぎり形而上学的超越を認めることはできないので、包括的な幻覚の可能性もまた認めることはできないのである。

私の考えでは、おそらくこうした仕方では包括的な幻覚を否定することは、区別不可能な幻覚の否定も含意する。この点を明らかにするために、まず真正な知覚から幻覚を区別できるケースを考えてみよう。佐藤によれば、ある対象の経験を、それと質的に同じ真正な知覚から区別できるのは、「他の諸対象に関する諸々の調和的な経験の体

系とのより包括的な連関において否定されざるをえない」(佐藤 2014:254)とき、言い換えれば、「事實的な経験のうちに培われた全体論的な信念体系が当の体験を真正な体験として許容しない」(ibid)ときである。それゆえ、これとは反対に、区別不可能な幻覚とは、(他の対象に関する)諸々の調和的な経験の体系とのどんな包括的な連関においても真正な体験として主体に許容されうるものとなる。<sup>(5)</sup>もしそうであるならば、私が区別不可能な幻覚に陥っているとは、まさに私が包括的な幻覚に陥っていることに他ならない。しかし現象学的観念論では、包括的な幻覚は不可能とされている。よって、包括的な幻覚が不可能であるならば、同様に、区別不可能な幻覚も不可能となる。

以上のように、包括的な幻覚の可能性によって、区別不可能な幻覚の可能性もまた退けられるのである。それゆえ、包括的な幻覚が不可能であるというフッサールの主張は、幻覚論法の前提(Ⅲ)を否定するものとして理解できるだろう。

### 3 包括的な幻覚は本当に不可能なのか？

では、そもそも現象学的観念論においては、なぜ包括的な幻覚が不可能とされているのであろうか。この点を明らかにするために、まず真正な知覚を実質的に定義する十全性原理に注目しよう(佐藤 2014:236)。

#### 十全性原理<sup>(6)</sup>

ある対象について、その対象が十全(完全)に与えられることになるような現出の連続体(意識連関)が実現されるならば、そこにおいて現出している(提示されている)対象は実際に存在している。また、ある対象が

実際に存在するならば、それが十全（完全）に与えられることになるような現出の連続体（意識連関）がレールに実現可能である。（佐藤 2014:237）

すでに確認している自己性テーゼと同一性テーゼにより、知覚経験一般（真正な知覚・錯覚・幻覚）において、対象は主体にとって直接的にそれ自体として与えられ、そうした対象が実際に存在する事物と同一であるケースが確保されている。これにくわえて、上記の十全性原理は、実際に存在する事物を対象とした知覚経験（つまり、真正な知覚）を特徴づけるものである。

十全性原理の最初の連言肢によれば、「ある対象が十全に与えられることになる現出の連続体（意識連関）が実現されるならば、そこにおいて現出している対象は実際に存在する」。それゆえ、知覚経験をとおして現出している対象が実際には存在しないならば（つまり幻覚であるならば）、その対象が十全に与えられることになる現出の連続体（意識連関）は実現されない、ということになる。したがって、十全性原理そのものから、包括的な幻覚の不可能性が帰結するようにみえる。

しかしこの原理はどのように正当化されるのだろうか。「ある対象が実際に存在するならば、それが十全（完全）に与えられることになるような現出の連続体（意識連関）がレールに実現可能である」という二番目の連言肢は問題ないように思われるが、包括的な幻覚の不可能性を実質的に主張している最初の連言肢は自明ではないように思われる。

ここで議論をわかりやすくするために、いま問題になっていることをもう一度確認しておこう。すなわち、現象学的観念論の枠組において、以下の主張が成り立たないということはどのように正当化されるのか、ということ

である。

### 包括的な幻覚

対象Xが十全（完全）に与えられることになるような現出の連続体（意識連関 $\Phi X$ ）が実現されるにもかかわらず、Xは実際には存在しない。

これが成り立たないことを正当化しているようにみえる佐藤の論述は以下のとおりである。

幻覚が幻覚として明らかになるような経験が存在しないとすれば、その経験は幻覚であるにもかかわらず、知覚と完全に同等に機能することになるだろう。だが、繰り返しになるが、そもそもこのような想定は可能なのであろうか。あらゆる観点から見て知覚と同様に機能する幻覚はもはや幻覚とは言われないのではないか。知覚と幻覚との概念的な区別が成立するためには、両者を区別する基準が何らかの仕方*で我々に与えられていることが必要であろう*（…）完全に調和的なシステムを形づくるなら、何が両者を区別するのであろう。まさにそうした区別の基準が存在しないというのが、フッサールの主張であった。（引用者強調 佐藤 2014:252-253）

以上の論述には二種類の主張が含まれている。一つは、「あらゆる観点から見て知覚と同様に機能する幻覚はもはや幻覚とは言われない」というものであり、もう一つは「知覚と幻覚との概念的な区別が成立するためには、両者を区別する基準が何らかの仕方*で我々に与えられていることが必要*」である、というものである。まず後者から

幻覚の可能性へと至る論証は、以下のようなものであろう。<sup>(7)</sup>

(1) もし真正な知覚と幻覚との概念的な区別が成立しているならば、両者を区別する基準が何らかの仕方ですらに与えられていなくてはならない。

(2) 私たちは真正な知覚と幻覚との概念的な区別をもっている。

(3) それゆえ、両者を区別する基準が何らかの仕方ですらに与えられている。

(4) 形而上学的超越は、両者を区別する基準としては利用できない。なぜなら、定義上、それは私たちには与えられないものだからだ。

(5) したがって、経験に内在的な仕方ですら両者を区別する基準が私たちに与えられている。つまり、幻覚が幻覚として明らかになるような経験が存在する。

ここでは、私たちが真正な知覚と幻覚の概念的な区別をもっているという事実から、その必要条件として経験内在的に認識しうる差異がなければならないことが導出されている。その差異をもたらすものは幻覚を幻覚として退ける別の経験である。既に確認したとおり、そういった経験は、他の諸々の経験のうちに培われた全体論的な信念体

系によって正当化され、それと両立しない経験を幻覚として退ける。佐藤の議論のポイントは、このような幻覚を打ち消す経験がなかったならば、真正な知覚と幻覚という概念的区別をそもそも私たちがもつこともなかっただろう、ということである。

しかし、この議論だけでは十全性原理を正当化するには十分ではないように思われる。注意すべき点は、この議論が、真正な知覚と幻覚という概念的区別を私たちが習得するために必要な条件を示しているにすぎないことである。たしかに、幻覚を幻覚として退けるより包括的な意識連関がまったく存在しなかったとしたならば、この概念的区別をそもそも私たちがもつことはなかっただろう。しかし包括的な幻覚は必ずしもそのようなことを要求してはいないように思われる。たとえば、幻覚を幻覚として退けた経験を、より包括的な意識連関のもとで退けるさらなる経験の系列があり、またその経験を退けるまた別の経験の系列があり、これが無限につづく、といった具合に包括的な幻覚が成立しうる。この場合でも、私たちは真正な知覚と幻覚の概念的区別をもつことができるだろう。つまり、私たちがもっている、「知覚／幻覚」の区別は、「まだ幻覚とは判明していない経験／幻覚だと判明した経験」の違いによっても獲得できるように思われる。そして、こうした仕方ですに入れた概念的区別をふまえて、「対象Xが十全（完全）に与えられることになるような現出の連続体（意識連関X）が実現されるにもかかわらず、Xは実際には存在しない」という可能性を私たちは興味に理解できるのではないだろうか。

この点にくわえて、最後に、「あらゆる観点から見て知覚と同様に機能する幻覚はもはや幻覚とは言われえない」という佐藤のもう一つの主張を考えてみよう。これに関しては、以下のような一般的な主張（共通要素原理の一種）として解釈できるだろう。

## 共通要素原理#

二つの心的状態が、主観的には、あらゆる観点において機能的にまったく区別できないならば、それらは本質的に同種の心的状態である。

以上のように定式化してみると、共通要素原理を認める論者ならば、佐藤の主張も同じく認めることになるように思われる。しかし共通要素原理と同様に、この種の原理（共通要素原理#）のもっともらしさは議論の余地があるだろう（本論の注4で指摘したような共通要素原理への批判が同様に当てはまるように思われる）。

## 4 まとめ

以上、これまでの考察をまとめると、結局のところ、『フッサールにおける超越論的現象学と世界経験の哲学』において私が最も関心をもったのは次の問題である。すなわち、形而上学的超越へのコミットメントなしに、本当に包括的な幻覚の可能性は理解できないのかどうか、ということである。なぜならば、諸々の経験の系列が実際に真正な経験に収束することがなくても、私たちは真正な知覚と幻覚という概念的区別をもつことができるように思われるからである。もし佐藤―フッサールが指摘するように、対象Xが十全（完全）に与えられることになるような現出の連続体（意識連関 $\Phi X$ ）が実現されるにもかかわらず、Xは実際には存在しない、ということが現象学的観念論と整合的でないとしたら、それはこの観念論のよりコアな別の主張と矛盾していなくてはならないように思われる。

註

- (1) 知覚の問題の定式化は、Crane (2011) を参考にして、本論の目的に適するかたちに変更を加えたものである。
- (2) 幻覚論法の定式化は、Fish (2010) の定式化を採用した。
- (3) cf. Mulligan (1995). 実際、佐藤 (2014) も同じ立場をとっている。
- (4) たとえば、オースティン (Austin 1962:50) が指摘するように、「レモンとレモンのかたちをした石鹼が主観的に区別不可能だからといって、両者を種的に同じであるとするのは疑わしい。
- (5) ここで幻覚論法の前提に現れる「主観的に区別不可能である」という表現は、現象的性格の同一性ではなく、反省をおして真正な知覚と幻覚を区別できない、というように認識論的な特徴づけが行われることになる。つまり、二つの経験の種が主観的に区別不可能であるのは、反省によって両者を区別できないとき、かつそのときにかきる、ということだ。
- (6) 佐藤 (2014) は、観念論の形態にあわせて、二種類の十全性原理を提示している。ここで引用したのは、「十全性原理 (一)」(p. 237) と名付けられたものだが、本議論にはこの区別は無関係なので、混乱を避けるために漢数字を省いた。
- (7) メルローポンティも、錯覚については同様の戦略を採用している。「知覚の真理性と錯覚の虚偽性とは、何らかの内在的な特徴によって、それら自身のうちで示されなくてはならない。なぜなら、もしそうでなければ、〔・・・〕私たちは錯覚そのものを意識することは決しないだろうからである」(Merleau-Ponty 1945:347)

文献

- 佐藤駿 (2014) 『フッサールにおける超越論的現象学と世界経験の哲学』、東北大学出版会。
- Austin, J. L. (1962), *Sense and Sensibilia*, Oxford: Oxford University Press.
- Crane, T (2011), "The problem of perception", *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Summer 2015 Edition), E.N. Zalta (ed.), URL= <http://plato.stanford.edu/archives/sum2015/entries/perception-problem/>
- Fish, W (2010), *Philosophy of Perception*, London: Routledge.
- Martin, M. G. F. (2004), "The limits of Self-awareness", *Philosophical Studies* 120 (1-3):37-89.
- Merleau-Ponty, M.(1945), *Phénoménologie de la perception*. Paris, Gallimard.
- Smith, A. D(2002), *The Problem of Perception*. Harvard University Press.